

公共空間の利活用した地域の賑わい創出事例について TAKASAKI Stand Bar(タカサキ・スタンド・バー)・高崎はしご酒

高崎商工会議所・高崎観光協会・群馬県 都市計画課

人口減少・少子高齢化により、利用者や担い手が減る中で、公共施設や道路・公園などの空間をより効率的に活用し、地域のにぎわい創出や持続可能な運営を図る必要が生じています。現在、公共空間を地域資源として活かし、観光拠点や地域ブランドの発信の場として利用する動きが拡大しています。

高崎市内においても、公共空間の利活用やまちなかの周遊性を高める取り組みが行われています。今回、そうした取り組みに携われた担当者の方に取材してきました。

◆ TAKASAKI Stand Bar(タカサキ・スタンド・バー)

高崎観光協会では、JR高崎駅東西自由通路において「TAKASAKI Stand Bar」を開催しました。

「TAKASAKI Stand Bar」は、ひとりでも気軽に立ち寄り、軽くお酒を楽しめるスタイルのイベントで、今年度は初開催で、10月14日から16日の3日間にわたり実施されました。

会場となったJR高崎駅東西自由通路には、これまでにない“憩いの空間”が生まれ、往来する電車を眺めながら、高崎市内の飲食店シェフが考案したここだけの限定メニューのほか、アルコール飲料やソフトドリンクを味わえる場となりました。まっちい〜ずでは、主催した高崎観光協会を訪問し、貴重なお話を伺ってきました。

※以下 Q：まっちい〜ず A：高崎観光協会

Q：「TAKASAKI Stand Bar」の企画・開催の背景や目的について教えてください。

A：このイベントは、ひとりでも気軽に立ち寄って軽くお酒を楽しめるような場を提供することを目的としています。市が管理する、これまで活躍の場として利用されなかった東西自由通路に“憩いの空間”を創出し、鉄道が行き交う線路上で、高崎が誇る食を味わっていただける企画としました。

高崎市長から「都内などには立ち飲み文化があるが、高崎にはそれがなかった」との思いがあり、市民が気軽に立ち寄り、交流できる場として、将来的には常設化も視野に入れています。今回はその第一歩として、社会実験として実施したものです。

Q：店舗の設計や配置において、歩行者の動線や空間の使い方にはどのような配慮をされましたか？

A：通路のため、全面をふさぐことがないよう点字ブロックの位置を調整することで、歩行者の動線をしっかりと確保しました。

また、電気の引き込みや消防法、衛生面など、多くの課題をクリアする必要がありました。さらに、カウンターや装飾といった設えについても、来場者にとって心地よい空間となるよう、細部まで工夫を凝らしました。

Q：鉄道事業者との調整はいかがでしたか？

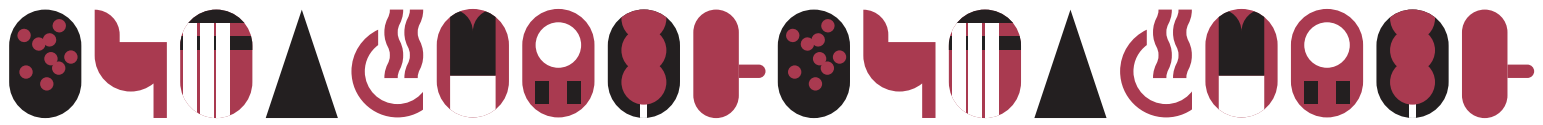
A：これまでは通路内での物販は禁止されていましたが、JR東日本高崎支社のご協力いただき、協議を重ねた結果、実施が可能となりました。群馬県が2024年夏から実施している「ぐんまちゃん駅」のご縁もあり、そうした連携がきっかけとなって、JR東日本高崎支社からもご協力をいただけたと思っています。

なお、通路の敷地はJR東日本が所有し、上物(建物部分)は高崎市が所有しています。JR東日本高崎支社からも、駅利用者に駅の外にも足を運んでもらいたいとお話をいただいています。将来的には、今回の取り組みが、民間事業者が主体となって公共空間を自ら利活用できる仕組みとして構築できることが理想だと考えています。



TAKASAKI Stand Bar 実施当日の様子





◆ 高崎はしご酒

高崎はしご酒は、高崎市中心部の飲食店を巡り、チケットを使って「ワンフード・ワンドリンク」を気軽に楽しむことができる食べ飲み歩きイベントです。毎年春と秋に開催され、参加者は気になるお店を自由にはしごして、地元の魅力的なお店や料理を発見できるのが特徴です。今回、高崎商工会議所のサテライトオフィス「まちなか経済情報センター」へお伺いし、貴重なお話を聞くことができました！

※以下 Q：まっちゃん〜ず A：高崎商工会議所

Q：「高崎はしご酒」の企画・開催の背景や目的について教えてください。

A：高崎市中心部の既存飲食店を会場として、お客様に参加店を「はしご」していただくイベントです。気になるお店を回遊して、飲食を通じて高崎を盛り上げていくことを目指します。

令和5年6月に、新型コロナウィルス感染症により大きな影響を受けた市内の飲食店の認知度向上や売上増加、ひいては飲食業界の振興、活性化、街なかの賑わいの創出、回遊性向上を図ることを目的としてスタート。イベント期間中に使いきれなかったチケットのアフターフォロー「アフターはしご酒」も開催され、2025年秋で6回目を迎えました。

今秋はGメッセ群馬にて開催された「KANPAI! GUNMA 2025」とコラボし、高崎はしご酒のチケット半券と試飲チケットの交換等様々な企画を実施しました。



高崎はしご酒 ロゴ

イベント参加者は仕事帰りのサラリーマンの他、女性や子供連れの方もいらっしゃいました。また、チケットの販売枚数は回を重ねる毎に増加しており、昨年から商工会議所や観光協会等の他、全国のファミリーマートでも購入可能な為、出張等での県外客も数多くご利用いただいております。



パンフレット表・裏

■ まちの回遊性・参加する(した)店舗側の声 等

Q：開催により、まちなかの回遊性やにぎわいにどのような変化がありましたか

A：以前より高崎市では高チャリと高カフェ(オープンカフェ・おまっちゃん98号参照)でまちの回遊性向上に取り組んでいますが、このイベントにより「これがあるから街に出よう」というお客様もいらっしゃいます。また、高崎駅の西口だけでなく、東口の店舗にもご参加いただく事で地域全体の回遊性向上を目指し、Gメッセや芸術劇場の利用者からの誘客につなげる機会にもなりました。

開催時期は参加店舗の意見を聞いて設定しており、年末年始は忘新年会・春は歓送迎会がある為6月と10月に開催しています。また、毎回、新規で参加するお店があり、店舗一覧で新規店に「NEW!」と記載する事でリピーターの獲得も目指しております。

商工会議所としては行政と協力して実施している事業であり、本事業を通して飲食店の支援にも繋がっているため、是非継続して開催したいと思っております。

◆ 取材を終えて

公共空間の利活用においては、まず「何のために、誰と、どのように使うのか」を明確にすることが不可欠です。単に一時的な賑わいを演出するのではなく、地域が抱える課題や将来像と結びつけた活用であることが求められます。

今回の取材を通じて、公共空間を地域課題の解決に活かしていくためには、「公共性」と「柔軟性」を両立させる仕組みづくりが重要であると再認識しました。公共空間は誰もが使える場であると同時に、特定の誰かの所有物ではありません。そのため、公平性・安全性・環境への配慮を踏まえたルール(管理)と、創意工夫を可能にする自由度(活用)のバランス設計が鍵となります。

そして、その実現には、民間事業者や地域主体をいかに巻き込み、共に運営し、空間の価値を“ともにつくる”体制をつくれるかがポイントであると感じました。

ご協力いただきました、高崎観光協会、高崎商工会議所のみなさま、ありがとうございました。

